

在日ブラジル人の母親の育児ストレス

静岡県立大学看護学部

清水 嘉子 (Yoshiko Shimizu)

元常葉学園大学

増田 末雄 (Sueo Mashuda)

要 約

我が国に在住する外国人は年々増加する傾向を示し、全国的に検討すると静岡県には外国人が多く在住している。そこで、静岡県浜松市における在日ブラジル人の母親の育児に関する問題を明らかにするために浜松市内の保育所・託児所に子供を預けている母親141人にポルトガル語によるアンケート調査を依頼した。

回答の得られた65人の調査結果を分析した。日本とブラジルとの子育ての違いについて意識しているものが65人中49人(75.4%)おり、子育てのつらさについては56人(86.1%)が感じていた。育児ストレスとしては、40人(61.5%)が抱えていることが明らかになった。特に、在日年数が5年未満の母親の育児ストレスが在日年数5年以上の母親に比べて多いことが明らかとなった。

一方、子育てに関する不満は65人中21人(32.3%)と少なく日本の治安の良さや、教育の施設設備や教科に対する良い評価が見られていた。本研究は在日ブラジル人の子育ての実態をとらえる基礎的調査として意義があると考えられた。

I. 緒 言

1990年6月の出入国管理および難民認定法(入管法)の改正に伴って外国籍の2,3世にも合法的な就労の道が開かれた。これまでの単身型から家族を呼び寄せる形態がふえ、また、日本のバブル経済の破綻で、長期滞在を余儀なくされている¹⁾。

労働省の推計によれば97年末の外国人労働者数は不法就労者を含め66万人で、日本の労働人口のほぼ1%に相当している。その大多数は、土日の勤務のみならず時間外勤務が行われている²⁾。

外国人労働者の数の増加と共に、外国人労働者の子供の教育の問題がとりあげられるようになり、子供が日本の学校にいかに対応するのか、また日本に慣れていくことによって帰国後のブラジルでの教育はどうなるのかという問題が生まれている。

親は仕事で忙しく、子供は日本の学校について行けずに、不登校となる。果ては非行者として社

会的な問題を起こす子供たちが後を絶たない。親子が、日本で共に生活していく上での新たな問題が生まれている。

その中で、教育のあり方を巡る取り組みが少しずつ行われ始めており、ブラジル人学校を創り、どこの国でも生活していけるグローバルな教育を目指す動きも見られている。また学校内では言葉について重点的に指導する教育を組み入れたり、地域でもボランティアによる母国語の教育なども行われている。さらに、乳幼児期を巡る母子保健問題や子育てへの取り組みが始められ、5カ国語による子育て相談のパンフレットを作成し窓口で配布したり、互いの交流を深めるための国際母子ふれあいフェアなどを開催している。また、外国人を受け入れている保育所などで外国人の子供の保育検討なども少しずつではあるが行われている¹²⁾。

全国的にみるとブラジル人は在日外国人の中で韓国、北朝鮮、中国について4番目に多くなっている⁹⁾。1997年文部省調査「日本語教育が必要な外国人児童生徒の数」によると静岡県はブラジル人が1525人で、愛知県・神奈川県について、3番目に多く、児童生徒の在籍する学校数も多い。自動車関連などの工業地帯である静岡県浜松地区に日系ブラジル人が仕事を求めて日本各地からやってきており、東京都や群馬県在住のブラジル人を数でしのぐ。特に浜松市は日本の市町村でブラジル人の住民数が最も多い。浜松市周辺は、本国への送金に便利なブラジル銀行の地方出張所が日本でただ1カ所あり、ブラジル食材店・レストラン、ポルトガル新聞などがそろい生活も便利である。仲間が多く言葉も通じる土地なら何とかなるといふことで、集まってくるのだと考えられる。その多くは会社の提供するアパートや寮に住み、失業すれば収入は途絶え家もなくなる事もある。

一方、地域ではブラジル人コミュニティーへの対応が迫られている。異文化摩擦が地域住民との間で生じているのである。

こうした我が国における状況を踏まえて、浜松市に在住している在日ブラジル人の母親の子育てに関する1)日本とブラジルの子育ての違い、2)日本での子育てのつらさや不満、子育てへの期待、3)育児ストレスとその対処の問題を明らかにし、異文化社会での子育てに伴う問題について検討した。

II. 研究方法

1. 調査期間 平成10年11月～12月
 2. 調査対象と方法 乳幼児期にある子供の子育てをしている在日ブラジル人の母親(子供を浜松市内の公私立の保育園13ヵ所またはブラジル人の経営する託児所3ヵ所に預けている母親)に対して日本での子育てに関する内容についてのアンケート用紙を作成し調査を行った(表1)。項目については、ブラジル人の母親ですでに幾つかの調査に関わったことのある人に内容の確認を依頼し表見上の修正を行った。その上でポルトガル語に直し、再度同じ人に確認を依頼した。

3. 調査対象の選択理由

(1) 静岡県内では浜松に集中して在日ブラジル人

表1 在日ブラジル人の母親のアンケート調査

1. お母さんの年齢と国籍と職業
2. お子さんの人数
3. お子さんの年齢と性別
4. 日本に来て何年目ですか？
5. 一緒に暮らしている人は誰ですか？
6. ご主人の年齢と国籍と職業
7. 子供さんに話すときは何語で話しますか？子供さんは何語で話しますか？
8. 日本とブラジルとの子育ての違いはありますか？ はい いいえ それはどのようなことですか？
9. 子育てをしていて、イライラしたりストレスに感じることがありますか？ それはどのようなことですか？
10. 日本で子育てをしていて、自分が体験した最も苦しい、いやな、困った出来事を書いて下さい。 この出来事はどのように対処しましたか？ その結果はどうでしたか？
11. 日本で子育てをしていて、不満、期待、希望がありますか？それはどのようなことですか？
12. 子育てで困ったときは誰に相談しますか？
13. その他何でも結構ですので、気がついたことがありましたら、ご記入下さい。

が生活していること

(2) 外国人の多くは両親共に働いていることが多くその多くは、保育所または託児所に子どもを預けていること

(3) 就労条件によっては公私立の保育園では保育時間が間に合わず無認可の保育所に頼らざるを得ない実状があること

こうした背景をふまえて今回、公立私立の保育園およびブラジル人の経営している託児所に子どもを預けている母親を対象とした。

4. 回収結果

浜松市内の公私立保育園 93人配布、53人回収(回収率56.99%)

浜松市内のブラジル人経営の託児所 48人配布、12人回収(回収率25.00%)

合計141人配布、65人回収(回収率46.10%)

5. 分析方法

ポルトガル語で記載されている調査結果を日本語に直し、内容を検討し、項目ごとに整理していった。推計学的検討は、検定で行った。

III. 結果

1. 対象の属性

対象の属性は表2に示す通りだった。

表2 対象の属性

		(人)					
		20～30歳	31～40歳	41歳以上			
両親の年齢	母親	26	34	4			
	父親	11	45	9			
両親の職業		製造業	サービス業	事務	専門職	主婦	その他
	母親	20	5	10	10	6	3
	父親	25	12	5	12	0	0
両親の国籍		ペルー	カナダ	ブラジル	日本		
	母親	0	0	63	0		
	父親	1	1	63	2		
子供の数	1人	2人	3人	4人			
	36	21	3	2			
在日年数	5年未満	5年以上					
	12	44					
世帯構成	核家族	2世帯	母子家庭				
	59	4	2				

親の年齢では母親では20～30歳代が40% (26人) を占めており、父親では30～40歳代が69% (45人) ともっとも多く全体的に高年齢の親が多かった。

父親の職業では製造業、サービス業、専門職が多く見られ全体の75% (49人) だった。また母親では製造業、専門職、事務職の順で多く見られて全体の72% (47人)、他に主婦が9% (6人) を占めていた。国籍については97% (63人) がブラジルだった。子供の数については、1人が55% (36人)、2人以上が40% (26人) となっていた。在日年数では5年未満が18% (12人)、5年以上

は68% (44人) となっていた。家族構成では核家族が91% (59人) となっていた。相談者の人数では1人が60% (39人) で、相談相手としてもっとも多いのはブラジル人の友人38% (25人)、夫22% (14人)、日本人17% (11人) となっており、数としては少ないが神があげられていた。

話す言葉についてはポルトガル語(親38% 29人、子42% 27人) がもっとも多く次いで、日本語とポルトガル語の混合(親28% 18人、子28% 18人)、日本語(親17% 11人、子28% 18人) となっていた。子供は日本語を使う傾向がやや多くみられていた。

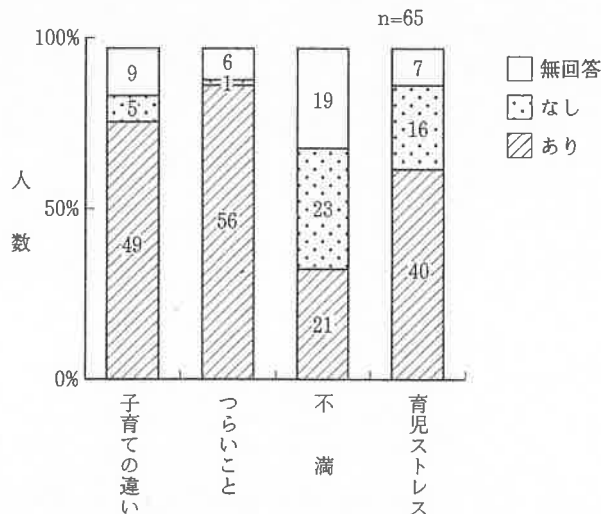


図1 子育ての受け止め

表3 子育てのストレス

項目	内容	各例数	合計例数
困難な仕事との両立	仕事で疲れているとき	1	15
	仕事疲れでストレスがあるため教育・家庭に影響があると思う。	1	
	疲れて帰宅後、家事をしなければならず、子供との時間がもてない。又子供をしかってしまうときがある。後で後悔する。	2	
	外国人は仕事を継続するのが難しいので、休んで学校に行けない。学校と会社の休日も違う。	1	
	日本での一日はとても早く、仕事・家の繰り返し。また仕事はきつく、家族の時間が少なすぎるのが子供の教育に影響している。	1	
	毎日が忙しすぎるため、子供に必要なオリエンテーションができない。	1	
	時間がなすぎること。	2	
	コミュニケーションの時間が少ない。	2	
	暮らしのリズムと子供との時間が少ない。	2	
	仕事時間が長いいため気短になりがちです。	1	
仕事が長く、きつい時。	1		
子供の自己本位な特性	遠い国で仕事はとてもきつく、家では休みただけでなにもできないが、子供はわがままを言う。	2	9
	全て分かることはとても難しいのでストレス・イライラがある。	1	
	子供は賢くなり私には考えられないようなことをすることがあるとき。	1	
	健康状態が良くないとき。学校で少し甘やかされて、家で言うことを聞かないとき。	1	
	言うことを聞かない(子供)の時、ストレスになる。	2	
	頑固でわがままなとき。小さいので私の言っていることが分からないから。	1	
	自分自身コントロールをなくすことがある。話し合いで分かり合う。子供達は外に出ないで良くテレビを見ている。	1	
帰国後の不安	子供が将来ブラジルに帰ったとき、ブラジルの生活・習慣になれるか	1	7
	子供がブラジルへ帰ったとき、暮らし・教育・言葉の違いの受け止め方が心配です。	1	
	ブラジルへ戻ったときのポルトガル語の勉強で少しイライラというか焦りを感じます。	1	
	教育のことを考えるととても心配になります。	2	
	日本の教育はブラジルと比較にならないほど良いので、子供達に必要ですが、帰国したとき、母国の言葉が話せないのが心配です。	1	
	ブラジルへ戻ったとき日本の学年どおりに入れたら…	1	
日本の文化への適応	私は日本語の読み書きができないため、子供たちの助けにならない。	1	5
	まだ日本の文化を知らないで、いろいろ気を使ってやりますので、それで疲れています。	2	
	人種差別があると聞いたことがあります。そのためにも小学校に入るなら日本の保育園から日本の習慣・文化を覚えさせれば、先生や日本の子供たちから人種差別はされないだろう。子供につらい思いはさせたくない。	2	
対学する学校の方満針に	学校では寒いのに薄着でよく風邪を引く。	1	2
	娘は日本の学校によく慣れたためストレスになるまでにはならない。学校では子供たちに薄着でいさせるためとても心配です。	1	
その他	夫と別れたこと。	1	1

2. 日本とブラジルの子育ての違い

日本とブラジルの子育ての違いは75.3% (49人) が感じていた(図1)。内容としては教育に対するものと、愛情表現の仕方についてあげられていた。特に教育に対するものでは、好意的評価として日本の教育は良い、すべてがそろっているなどの意見が全体の17人と多くっており、厳しい、冷たい、時間や行事が多いなどの意見は5人となっていた。愛情表現では冷たい感じがする、愛情の表現が少ないと感じている人が3人いた。

3. 子育てでの辛いこと、不満、期待

子育ての受け止め方では86.1% (56人) がつらいと答えていた(図1)。

文化言葉への適応、社会生活上の困難、差別や孤独感などがあげられていた。日本の文化や言葉への適応(45人)では習慣、食べ物、考え方、読み書き、話、コミュニケーション、仲間には入れない、集まる場所がないなどとなり異文化での生活でのとまどいや寂しさ、意思疎通の困難さなどが含まれていることがわかった。社会生活上の困ったこととして(11人)、保育園の手続きや園との連絡、国民保険の加入を巡る問題があげられていた。3件と少ないがブラジル人に対する人種差別を感じる人がいた。

子育てでの不満については、32.3% (21人) がある、25.4% (23人) がないと答えていた(図1)。無回答が19人(29.2%)と他の質問項目に比べて多かった。不満として受け止めていたものは、子供との時間やブラジルに帰ってからのこと、子供の自己本位な特性や社会生活上の不満があげられていた。不満がないものは、その理由として日本の治安の良さや教育の良さについてあげていた。

子育てへの期待では、行政への改善を希望するもの(7人)、ポルトガル語の学校や科目がほしい、学校方針に対して、日本人との交流やブラジル人同士の交流、雇用者側の理解などがあげられていた。保育園や幼稚園の質や保育時間、入園の手続きに関するもの、相談室の開設や、病院の対応などが実際生活していく上での改善項目としてあげられていた。学校方針に対しては、寒いときに半袖、半ズボンに着替えるということに対する不満や給食を食べることがあげられていた。また、こ

うした社会で子供が育つことで、自分の子供も日本人ようになっていくことへの心配があげられていた。また、仕事に追われた生活の中で、ブラジル人同士の交流ももてずにいること、日本人とどのように交流を持つことができるのかについて心配していることがわかった。雇用者に対しては、子供を持つ親としての人権の確保の配慮を期待するものがあった。

4. 在日ブラジル人の子育てストレスとその対処

育児ストレスについては61.5% (40人) がある、24.6% (16人) はないと答えていた。9人は無回答だった(図1)。具体的な項目としては、困難な仕事との両立についてあげており(15人)、ついで子供の自己本位な特性(9人)、帰国後の不安(7人)、日本の文化への適応(5人)、学校方針に対する不満(2人)があげられていた。詳しい内容については表3に示す通りだった。

育児ストレスへの対処では、日本語の勉強(24人)、人の助け(10人)、日本人との交流(5人)などが多く用いられており、数は少ないが気持ちや見方を変えたり、現実逃避する事で乗り越えていることがわかった。

5. 育児ストレスの有無と母親の年齢、在日年数、子供の数、話す言葉との関係

対象65人中9人の無回答者を除いた56人のストレスの有無からみると、図2にみられるように在日年数が5年未満の人は5年以上の人と比較してストレスのあった人が、有意(χ^2 検定において $P < 0.005$)に多くなっていた。

有意差は認められなかったが母親の年齢、子供の数、母親の話す言葉と育児ストレスとの関係は図3~5に見られるような結果になった。

母親の年齢では31歳以上の年齢の高い母親より、20歳代の母親の方が育児ストレスが多い傾向にあった。

普段ポルトガル語を話す母親は日本語や日本語とポルトガル語の混合で話す母親よりも育児ストレスが多い傾向にあった。

子供の数では、2人以上の母親の方が1人の母親より育児ストレスが多い傾向にあった。

IV. 考察

1. 子育ての違いについて

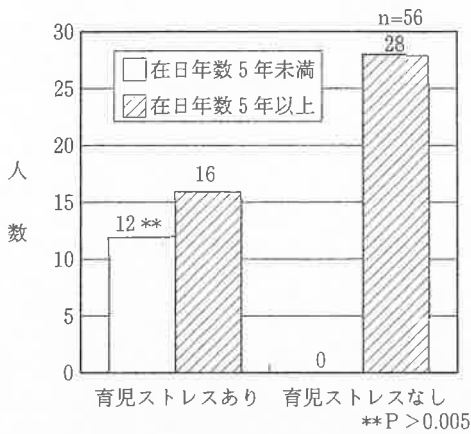


図2 在日年数と育児ストレス

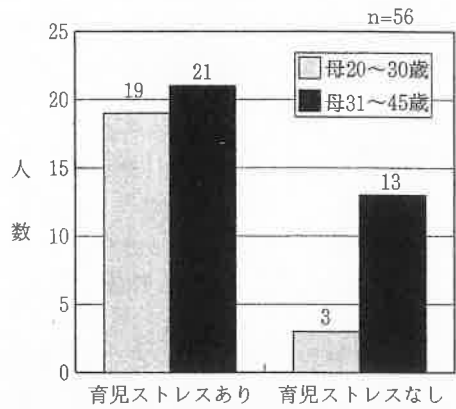


図3 母親の年齢と育児ストレス

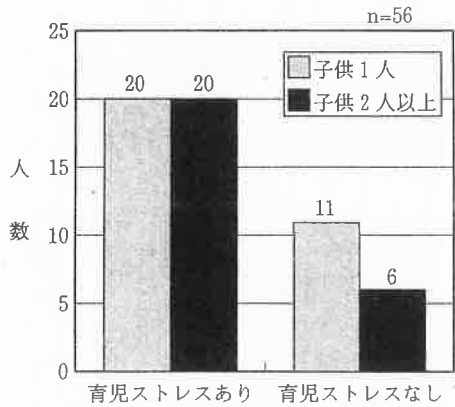


図4 子供の数と育児ストレス

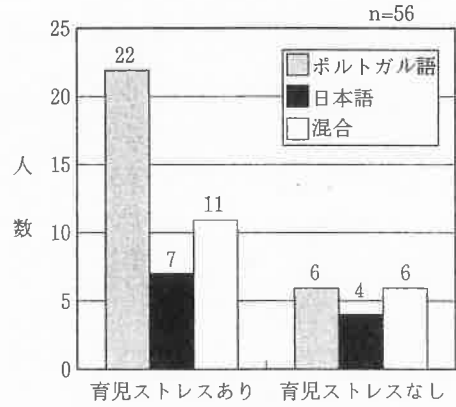


図5 話す言葉と育児ストレス

今回の在日ブラジル人に対する調査結果から、子育ての違いとして、学校教育に対するものや子供への愛情表現などがあげられていた。教育の違いはあるとしながらも、教育に対しては好意的に評価していた。ブラジルと日本の教育を比較した場合、我が国における情操教育を含めたカリキュラムの内容や施設設備に対する満足と考えられた。愛情表現については感情や思いを行動で示す文化を持った国と日本のようにこうしたものを心の奥に秘めて押さえることを美德とし、察する国との文化との違いが根底にあると考えられた。

対象を就学前の子供を持つ母親にしたにも関わらず上の子供が、学校に上がっていることなどから、学校に対する問題があげられていた。こうした事柄は母親にとって大きな問題となっているこ

とが伺われる。ブラジル人の母親は保育所や託児所に子供を預けており、子育ての違いについての問題がもっと提起されるかと予想していたが、少なかった。対象が小さいことから、子供自身の声となって親に届いていないことや、施設での子供の生活については、まかせているかまたは、生活という点で大きな文化の違いとして表面化していなかったのではないかと考えられた。また、調査対象が在住する浜松の園では、ポルトガル語のパンフレットを作成し在日ブラジル人の母親の不安解消や意志疎通を図るための努力がなされていることも関係していると考えられた。本調査の対象はブラジル人経営の託児所に預けている人が全体の18%を占めていることも関係していると考えられた。

2. 子育てでの辛いこと、不満、ストレス

予想通り多くの母親が子育てでの辛いこと、不満、ストレスを感じていた。異文化、言葉への適応、社会生活上の困難、差別や孤独感、母親にとっての辛いことである。特に、不満・ストレスについてみていくと、子供との時間がとれないということが大きくあげられており、家族や家庭教育の重要性を認識しているブラジル人にとって苦痛であり、不満として表れていると考えられた。ブラジル人の母親は長時間の仕事という厳しい労働条件の中で、疲れ、イライラし、子供をしかってしまう状況がみられ、子供の自己本位な特性に関しては子供のわがまま、同じことの繰り返し、頑固、言うことを聞かないなどがあげられていた。働く母親にとって万国共通の内容と考えられた¹⁹⁾。帰国後の不安や日本文化への適応、学校方針に対する不満はブラジル人独自のもので画一的に扱われることへの不満であり、改善への期待と考えられた。

今回、育児に対する不満が全体の25%と少なく、育児に対するつらさやストレスとは異なった傾向が明らかとなった。つらさやストレスとしては感じているが、32%は満足しており、治安の良さや施設設備や教科内容に対して評価しており、母親の全体の受け止めとして満足となったと考えられる。

日本社会の適応や言葉の習得についてはむしろ子供自身の適応の早さに比較して、親自身の生活内容の閉鎖性から、また年齢的なものから適応が困難となり、その2者間でのずれが大きくなっていく新たな問題を提起している⁹⁾。今回の調査では子育ての対象を乳幼児期としていることから数としては少なかった。こうした問題は、子供の年齢が高くなるに従って生じてくるものだと考えられた。在日外国人の日本語能力は「聞く話す」は5割ができるが、「読む書く」は1/3程度に減っている⁹⁾。子育てしている母親たちへの「読む書く」の能力向上のための支援が望まれるところである。

今回の調査対象は核家族がほとんどであることから考えられるが、夫や家族にたいするストレスはみられなかった。日本人の調査によると子育てにおける人間関係のストレスが高かったことか

ら、日本人の母親と在日ブラジル人の母親の育児ストレスの違いと考えられた¹⁹⁾。在日ブラジル人の話によると「夫は妻にねぎらいの言葉をかけ、むしろ家庭は職場でのストレスを解決する場として機能している」という。「ブラジル人は自分を最も大切にしているから、もし、夫婦が互いにストレスになるならば、離婚しているのが普通」という言葉から、家族関係のストレスがないことが理解できる。

3. 育児ストレスに対する対処

これらストレスに対する母親の対処では、圧倒的に日本語の勉強が多く、さらに人の助けや母親自身が努力して変わるといったものが多く、積極的に対処行動と位置づけることが出来る。異文化で暮らしていくためには、まずその問題を解決するための積極的行動を起こすことで、適応していこうとする在日ブラジル人の母親達の姿が伺われた。その根底には、母国では中流としての生活が確保されていたにもかかわらず、日本に出かけもっと何かをしたいという動機を持った人々であることも関係しているのではないかと考えられた。また、在日年数が5年未満での育児ストレスを感じていたものが多かったことをふまえて日本での暮らしの初期の段階での支援が望まれる。

4. おわりに

在日ブラジル人の母親は、日本の文化社会への適応、困難な仕事との両立、子供との時間をもてない、帰国後の不安を持っており、その対処として、日本語の勉強、人の助けを得る、日本人との交流等の積極的に対処行動が見られていた。

今後、こうした結果を基に在日外国人の子育てを巡るより詳しい調査を実施していきたいと考える。特に異文化社会における母親の子育ての問題を日本人の母親との比較などを通して検討しさらに深めていきたい。

(今回の調査にご協力をいただいた浜松市内の保育園の園長はじめ関係者の皆様及び在日ブラジル人の母親に深く感謝する)

文 献

- 1) 渡辺正子編:出稼日日系ブラジル人 上論文編, 就労と生活 下資料編, 体験と意識, 109, 明石書店, 東京, 1995.

- 2) 手塚和彰他:外国人労働者の就労実態総合的実態調査報告集, 明石書店, 東京, 1992.
- 3) 佟珊他:在日中国人の子育て, 小児保健研究:1996.
- 4) ジャンジーラ前山:異文化社会への適応-在日日系ブラジル人の子供たちを中心に-, 平成8年度文部省科研費基礎研究(B)「国際理解教育モデルの理論的実証的研究」中間報告書:1998.
- 5) 李節子編集:在日外国人の母子保健, 日本に生きる世界の母と子, 医学書院, 東京, 1998.
- 6) 喜多川豊字:名古屋市日系ブラジル人アンケート調査報告書-名古屋・浜松・群馬の日系ブラジル人生活・意識比較分析-, 1994.
- 7) 斉藤弘志:新しいブラジル, 歴史と社会と日系, サイマル出版社, 東京, 1988.
- 8) 国本伊代他ラテンアメリカ社会と女性, 新評論, 東京, 1985.
- 9) 小川久貴子他:在日外国人母子保健研究の分析-1986年から1996年の文献調査結果から-, 小児保健研究 58 (1): 71, 1991.
- 10) 布田佳子他:国際育児相談のまとめと分析, 東京都衛生局学会誌:95, 1995.
- 11) 渡辺洋子他:在日外国人が日本の母子保健医療に望むもの, 母子衛生:36, 1995.
- 12) 吉岡毅:在日外国人に対する乳幼児保健サービス, 小児内科:26, 1994.
- 13) 筑波優子他:在日外国人母親への母子保健に関する実態調査, 日本公衆衛生雑誌:42, 1996.
- 14) 山田牧他:在日外国人母子保健問題における一考察, 日本公衆衛生雑誌:43, 1996.
- 15) 清水嘉子:子育てに関する研究-日本の母親と在日ブラジル人の母親の育児ストレスを中心に-, 常葉学園大学修士論文, 2000.